

## 「永遠の今」と死の自覚——不在と反復をめぐって

石井 砂母亜 (跡見学園)

西田哲学の根本動機が「人生の悲哀」にあったということは、多くの論者が指摘していることである。『無の自覚的限定』(1932)では、「哲学の動機は『驚き』ではなくして深い人生の悲哀でなければならない」(6-116<sup>1</sup>)と語られ、最晩年論文「場所的論理と宗教的世界観」においても、「人生の悲哀」が自己の存在そのものを頭わにする「死の自覚」として言及される(11-394)。「一般に生物は死す……私も私が死ぬことを知って居る。しかし唯かゝる意味に於て、私は死を自覚して居ると云ふのではない。……理性的なるもの、一般的なるものは、固、生きたものではないのである。生まれぬものに、死と云ふものもない。理性が死を自覚すると云ふことはない」(11-394)と語る西田において、「死の自覚」とは生物学的な死や第三者的な視点から記述される死ではない。もちろん、道徳的に意味づけ価値づけしうる死でもない。そうではなくて、極めて具体的個別的な死に向けられた「死の自覚」である。親しき者の死は、自己からのあらゆる意味づけ価値づけを撥ねつけつつ、われわれを他人事ではない吟味の場へと引き摺り出すように思われる。「あの時、ああしていれば」という後悔と共に、過去の出来事そのものが固有のリアリティーを獲得し、新たな意味を渴望する経験として現在のうちに「反復」される。それは決定された過去が解体し、非因果的・非過程的に再構築され、「その都度」という新たなる生の受け取り直しの中で自己が刷新されることと言ってよいが、こうした問題設定は『無の自覚的限定』以降、しばしば西田哲学において「永遠の今の自己限定」という言葉遣いで言及される事柄と隣接しているように思われる。

本発表では、「死の自覚」を通して〈非因果的、非過程的に自己の生が受け取り直される〉ということ、西田の時間論「永遠の今の自己限定」の立場から主題化したい。哲学の動機を「人生の深い悲哀」と語る『無の自覚的限定』において、西田は「すべて実在なるものは時に於てあると考へられ、時は実在の根本的形式と考へられる」(6-342)と実在を時間論から問い直す。時間とは、「一瞬の前にも返ることができない」(6-183)無限の流れであり、その限りでわれわれは常に「不在」に晒されている。昨日のわたしも今日のわたしも瞬時に消えゆくものであり、現在は「掴まれない」ことを本質としている。消えゆくことを根本態勢としながら、しかし同時に昨日の私と今日の私は「現在」において切り結ばれている。言い換えれば〈掴まれることのない現在が掴まれる〉ところに自己の自覚があり、西田はそれを「絶対無の自覚」、「永遠の今の自己限定」という術語で語りなおそうとする。本稿では、「死の自覚」を通して照らし出される自己の存在が「絶対無の自覚」であること、そうであるがゆえにこの自覚を「永遠の今の自己限定」として語りだす西田哲学の内実を明らかにしてゆきたい。

<sup>1</sup> 下村寅太郎他編『西田幾多郎全集』(全 19 巻)、岩波書店、1965-66 年(第二版)からの引用に関しては、6-116 のように、本文中に典拠箇所を巻数と頁数を示す。